

当時を思い出して

リーダー（OB）より、3年部員がいないので、指導者不足のため、アドバイザーとして、別紙企画書の通り、2週間の夏山合宿に参加してほしいとの要請があり、受けることにした。

メンバー12名全員が日吉ヶ丘高校1年の山岳部員で、指導陣は同校OBで、リーダーが大阪工大、サブリーダー2名と私が同志社大学の学生という異色の構成であった。

まだ、体のできてない高校一年部員に、今では考えられない重い荷物を担がせ、長い縦走路【何箇所かは難所】を歩かせ、定地合宿では雪上技術、岩登り技術の実践訓練と大学山岳部並の計画で、背伸びした計画であった。

計画書より、1日遅れて出発し、1963年8月25日予定通り、北アルプス3大雪渓の1つである針の木雪渓の下部で昼食を済ませ、半パンツで特大のキスリングを担ぎ、あえぎながら登っていった。

上半身は真夏の日照りをまともに受け、下半身は雪の冷気で足がおかしくなる。

段々と、傾斜が増し、アイゼンを着用してないので、不安であるが何とか全員無事、雪渓を乗り越えた。

しかし、若城リーダーの様子がおかしい。

聞いてみると、腹痛のようで、荷を担げる状態ではない。

さりとて、部員に荷を分担する余力はないので、軽量級の私（今と随分違う）が荷を分担したが、ゆうに私の体重を超えている。

リーダーをその場に置き、針の木峠のテント場に着くと、ピストンで彼の残った荷を担ぐ。その日は、彼の回復を祈って、床につく。

翌日も、リーダーは完全に回復しないため、色々、協議した結果、テント1張収容人員4名だけが計画通り、後立山を縦走することにし、リーダー・サブリーダー等の9名は黒部川に一旦下り、平から黒部川を下り、内蔵助谷出合いから内蔵助平、真砂沢出合に出て、定地合宿地の剣沢で合流することとした。

縦走組3名を選定するにあたり、希望者と個人の力量を考え、大柄で高校生離れした馬力の海老名（ラグビー部であれば大型ホワードスタープレイヤーになれる素材）、若い割には山の知識がありバランスのとれた猪俣、小柄だが闘志と度胸のある川木の3名を選ぶ。

当然、当時は携帯電話もなく、無線も携行してないので、サポート隊も含め、今後の連絡はできないことになる。

朝から、食糧品、野営用具など、荷を分けるのに時間がかかった。

縦走隊が精鋭部隊であったこともあり、登攀用具については全部を持ったため、キスリングの中身はさらに重くなった。

後ほど、近道組がザイル（補助ザイルも）がないため、真砂沢の急雪渓をトラバース中にスリ

ップしたとき、細引で身体を確保していたため、細引が切れ、団子状に後輩多数が転落して行ったそうである。

幸いに、途中で止まり、事なきを得たとの事であるが、せめて補助ザイルでも持って行けばこのようなことにはならなかったのと思う。

とにかく、荷物の分別等で出発が大幅に遅れ、お互いに、無事の再会を約して分かれる。

遅れて出発したこともあり、休憩をあまり取らずに、少し、早いピッチで進む。

針の木岳(2821m)を登り、スバル岳を越え、赤沢岳(2678m)を縦走する頃には、そのため、隊員はかなり消耗していることがうかがえるが、叱咤激励し、尚も進むが、本日の宿泊予定地種池にはとても到着できそうもない。

尾根道のため、水が不足しており、所々に雪があるが、解かさねばならず、やむなく、時間を惜しんで、水補給を断念する。

ようやく、夕刻に新越乗越に到着する。

誰のポリタンクもほとんど空になっていた。

特に、猪俣、川木両君は完全にグロッキーである。

十分に休憩し、テントを設営するよう命じて、馬力の海老名君とで、水を求めて、道のない沢を黒部川に向かって、下りていく。

随分降りるが、伏流水のため、水は現れてこない。

水がなければ夕食はおろか明日の朝食も取れない。

口はカラカラであるが尚も下りていく。

一時は黒部川本流まで下りるのかと真剣に悩んだ。

随分して、かすかに水の流れる音がしたときは本当にうれしかった。

水をこれ以上飲めなくなるまで、がむしゃらに飲み、2Lのポリタンク4本分を補充し、草をかき分け、岩をよじ登り、元きたルートを探しながらよじ登っていく途中で日が暮れた。

戻るところがわからなく、困っていると、上部で、ライトを照らしてくれ、ようやく、新越乗越に戻り、遅い夕食となった。

貴重な水で、米をといてラジウスで炊くが、高山で気圧が低いため、うまく煮えず、けっしておいしいといえるものではなかった。

明るる日には宿泊予定地の種池と爺ヶ岳を午前中に通過し、冷池より鹿島槍ヶ岳に到達し、前日の遅れを取り戻した。

7月28日は鹿島槍ヶ岳から八峰のキレットの岩稜地帯に入り、鎖に助けながら、重いキスリングに気を付けながら、通過する。

今と違い、当時のザックは横長で横の袋に岩が触れ、反動で振り落とされそうになる。

横ざしにしたピッケルを岩に当たらないように気をつけながら慎重に通過する。

もちろん転落すれば命はない。

一人一人に注意し、アドバイスしながら、通過に充分時間をかける。

それ以外のことは現在、ほとんど覚えていない。

みんなががんばってくれて、無事、通過することが出来た。

これらのことは彼らの両親には話せない。親は心配であったであろう。

親になって、初めてこのことが解る。

後で、気がついたことだが、この計画を学校には知らせず、ある親が聞きにいった、初めてこの山行がしれたとのことで、現在なら、問題になるところだが、何もなかったので、表面に出なかった。

五竜岳より、唐松岳、不帰キレット越えの白馬岳などを縦走したのも、ほとんど記憶にない。

ただ、どこの峰かは忘れたが夕陽を後に受けて、ガスの中に虹色に浮かんだ我々の姿がはっきりと見え、これがブロッケン現象だと皆で感激した。

また、毎日、ご飯が大釜でうまく炊けず、芯のある米で、旺盛な食欲も萎えていたことを覚えている。

前の合宿では、人によってはアルミの大きな器に6~7杯食べたツワモノがいたのが懐かしい。

天気はいつも晴れていたような気がするが、白馬岳からマムシの巣窟と言われる祖母谷への下山中には強い雨が降り、上半身網シャツ、下半身は短パンで、下っていった。

そのほうが下着をぬれにくくし、熱を奪われないためであったが、マムシには無防備であった。

かまれば、この場所では血清が間に合わなく、死を意味していたが、少しは不安があったが若さの方が勝っていたのかもしれない。

常に尾根伝いできたので、大きく高度を下げ、黒部川の支流に来たときは少し、ほっとした気分になった。

祖母谷には温泉が湧き出ており、周りを樹木で囲われた山小屋の横でテントを設営した。

珍しく米が余ったので小屋に行き、こっそりとビールに変えた。

朝晩に1人、米2合ずつを用意しており、いつもは確実に平らげるところであるが、この時に限り、毎日がシンメシでさすがの大食漢も食欲がなかった。

当時は今のようにヘリコプターで荷揚げするようなことはなく、特に米は配給制で貴重品であり、山小屋では高価で買ってくれ、また、いろんな品と交換してくれた。

7月31日に樺平でサポート隊と合流し、関西電力のご好意で200mの垂直エレベーターと随道のトロッコに乗せてもらった。

「黒部の太陽」に出てくる通り、トンネル内は所々、熱風と煙が出ており、随分、熱かった。

その中で、サポート隊のもってきてくれたオニギリがまともなものを食べてない我々には涙が出るほどおいしく、胃にしみわたり、大げさに思われるかもしれないが、このようにおいしいものを食べたのは生まれて初めてのよう思った。

その日の宿泊場所は忘れたが、雪渓の雪の中に、小屋で交換した缶ビールを埋め、川沿い

の温泉を自分流に作り、湯加減は川から水を引き入れ、久しぶりに手つくりの湯船に浸かった。

夕食はサポート隊の持参してくれた肉(少し腐りかかっていた)と野菜で、冷えたビールを片手にすき焼きパーティとあいなった。

今までの苦労も吹っ飛び、これぞ、山の醍醐味と幸せの絶頂にあった。

少し、ショートカット隊に申し訳なく、食べたいものもあったが、味噌漬等の牛肉などは合流地点の剣沢までお預けとした。

記憶は断片的だが、その中でも、池の平から見た剣岳はアルペンムード満点で当時、見たことはないが、ヨーロッパアルプスにも負けない光景に思え、少なくとも、私が見た山では一番美しく、印象に残った。

この景色に付け加えると、後から登った雪溪越しの「剣岳三の窓」の紺碧の空も素晴らしかった。

剣沢では16名全員元気で、スイカを割って、再会を喜び合った。

その夜はちょっぴり贅沢な食事だった。

今、メニューを見るに、ご飯は多かったが、おかずは粗末なもので、しかも、特大のキスリングがかくれるくらいの大鍋に石油コンロ(ラジウス)をかけ、火力不足と沸点が低いため、家で食べているご飯に比べ、まずいが、食欲旺盛な年頃と、ハードな運動量により、今では考えられない様な量を食べ、中には合宿直後、体重が増える者がいたのには驚きであった。

4日間、剣沢でテントを設営し、8月2日より、各人の技量により、コースを分けて、剣岳にアタックに出かけた。

私は技量と度胸のある者を人選し、登攀具を持って、毎日、岩登りに出かけて行った。

特に、三の窓雪溪と長次郎谷の間にある八ツ峰は急峻な昇り降りの繰り返りで、当時、ガスがかかっており、岩壁越に、「あ〜あ」という叫び声が聞こえ、直後に、岩ナダレの音がしたが、ガスが視界を遮り、水平距離としては、遠くはないが、お互いに絶壁になっているため、一旦奥深く下りて、登るのには相当な時間もかかり、困難極めるような所で、相手からの助けの叫びもなかった。

不気味な静寂の中、影のような冷たい岩肌と白い世界の中に我々はいた。

しばらくして、また、冷たい岩を慎重に、つかみ、踏んで進みだした。

剣岳の主稜線に出て、劔岳から、どのようなバリエーションルートを下山したかは40年経った今、残念ながら思い出せない。

ただ、若城リーダーからチンネを登ろうかと問いかけがあったが、一瞬、中央バンドを見ながら、ルートを考えていたが、後輩を待たすことになり、何よりも、時間がないので断念したことだけは覚えている。

ピッケルの使い方など雪上訓練、ハーケン打ち方、カラピナとザイルの使い方、中でもセルフビレーなど岩登りの基礎訓練を後輩に教え、バリエーションルートの実践訓練を実

施した。

予定通り、2週間の夏山合宿を、終え、全員無事に、母校に戻り、それぞれ、思い出を胸に急いで家路に向かっていった。

山に衝かれた青春時代の懐かしい一コマが半世紀近く過ぎた今日でも、部分的ではあるが、鮮明に浮かんでくる。